



# 新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

桜前線がようやく小田原にもやって来ました。長興山のしだれ桜は今年も美しい姿を見せてくれるのでしょうか。かまぼこまつり、おでん祭を皮切りに、小田原がにぎわう春本番です。わくわくする新年度。4月の新九郎は、展示、デッサン会、講座、ギャラリートークと楽しい企画が盛りだくさんです。皆様のご来場をお待ちしています。

## 新九郎 4月の展覧会のご案内

	会期 展覧会名	見どころ
	4/2 (水) ~7 (月) 第32回小田原写真研究会作品展	自然、街、造形等自由な創作の 写真展 会員8名
	4/9 (水) ~14 (月) 第5回水墨画女流展	伊庭由利子・田中夫季子・近藤 久江、女性3人の作品展 水墨画約40点
	4/11 (金) 19:00-20:00 ブッダと仏像入門②	講師：廣瀬郁実 (仏像ガール) 連続講座。今回のみ参加も¥600
	4/18 (金) ~20 (日) 禅文化展覧会	東京院所蔵禅の書画を公開 20日 (日) 13時~ 岸達志老師による講演
	4/22 (火) 出張ギャラ リートーク「石田徹也展 -ノート、夢のしるし-」	[19:00-20:30] 平塚市美術館学 芸員勝山滋氏が展覧会の見ど ころをお話しします。入場無料
	4/23 (水) ~28 (月) 火曜パステル会作品展	花、静物、風景等のパステル画 14名の会員による作品展 賛助出品 高木なえ
	4/24 (木) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
	4/25 (金) 19:00-20:00 ブッダと仏像入門③	講師：廣瀬郁実 (仏像ガール) 連続講座。今回のみ参加も¥600

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	会場
4/2 (水) ~7 (月) ナチュラル展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
4/10 (木) ~14 (月) 第1回湘南古美術コレクション	アオキ画廊 2F 0465-24-0637
4/23 (水) ~28 (月) 第16回喜楽舎展	アオキ画廊 2F 0465-24-0637
4/9 (水) ~14 (月) 第4回 (油彩) 修美会展	お堀端画廊 0465-23-7819
4/29 (水) ~28 (月) 田島智子 七宝展	お堀端画廊 0465-23-7819
4/8 (火) ~13 (日) 浅香順一写真展	丹沢美術館 0463-83-9550
4/15 (火) ~20 (日) 西巻一彦石彫展一日々刻々	丹沢美術館 0463-83-9550
3/29 (土) ~4/6 (日) 第9回俺の丹沢 (写真展)	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031

## 思うことなど 横井山 泰



いよいよ春。酒匂の堤は水蒸気があがっている。  
 絵本が完成! (小田原では伊勢治書店各店舗、nico café、マルタジョイ本店。箱根では、ナラヤカフェ。東京では銀座の Niche Gallery で扱っていただいています。)

勤務先の小学校では図書館と各クラスに置いてくれた。図工室にやってくる子どもたちが「先生みたよ!」と嬉しい感想を聞かせてくれる。私立で小田原からも来ている子どももいるのだが、早速、伊勢治で買ってくれたそうだ。2年前から妙なご縁ではじめた先生であるが、最初に担当した5年生は卒業生である。最後の授業は3月11日だった。3年前のその日、パリのアパートで「TVをつけてみる!」という友人からの電話で言葉を失った。そんな話をした。彼らもその日は忘れられないという。高校の教え子も卒業した。僕が高校を卒業した年。阪神の震災、オウムテロの年の産まれである。18歳の僕は受験に失敗し、絶望の淵で上京し暗い浪人生活がはじまった。そういう記憶があるからか? 春は好きな季節ではないのだが、当時の卒業式で「絶望とは克服するための言葉だよ」と恩師に言われたのを思い出す。ロンドンに進学する教え子がアトリエに遊びに来た。映画監督を目指す彼に期待したい。さて、僕にとっては協調性や安定性の問題だ。人に会わなきゃしょうがない。

## 東海道五十三次 ⑧ 由比宿 (薩埵峠) 5年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



由比宿に入ると由比本陣跡が公園として整備され、正門、石垣、木堀、物見櫓、馬の水飲み場などが修築・復元されている。土蔵の跡には東海道広重美術館があり、歌川広重の作品を中心とした800余点の版画のほか、江戸期の由比の様子を知る資料が展示されている。

広重の描いた構図に近い風景が残っているとされている数少ない場所の一つが、由比宿と興津宿の間に位置する薩埵峠 (さったとうげ) からの富士山を望む風景である。確かに海岸線を走る東名高速がなければ広重の版画そのままの風景である。

**東泉禅院訪問 岸達志老師  
小田原市 久野**



いつかゆっくりとお話を伺ってみたいと敬愛する方とのその時が遂に訪れた。東泉院は、護国山と号し大永元年（1521）本寺第7世大休宗恵開山による由緒あるお寺である。築250年の堂々たる本堂と庫裡。山門をくぐると、苔むした庭、閑寂な佇まいは禅寺らしい風情ある境内だ。庭を掃き清めていた二人の若者から明るい挨拶をいただき、緊張は一気に和んだ。ご無理なお願いをした私たちに、老師は居すまいを正されてご対応下さった。

東泉院は地域の文化拠点として実に多彩な活動をされていた。60年以上続く坐禅会、指月会（禅の読書会）夏季大学 梅華講のほか、11月3日文化の日には美術品・墨跡など寺宝の一般公開を20年以上も行っている。寺宝の展示をより多くの方のためにと始められたのが、「禅の書画展」（現禅文化展）である。新九郎では今年も4月18、19、20日に開催される。すでに15回目（新九郎では9回目）となる本展は、毎回テーマを持った展覧会と岸老師の講話が評判である。音楽で始まる穏やかで平易なお話は、かつて道元禪師もこのように市井の人々にご説教下さったのだらうと思える心休まる時間である。訪問中も次々の来客に、ご多忙な日常生活を垣間見た。80代になられ今尚現役で学び続けていられるそのエネルギーの源は、一体どこから来るのか興味のあることだった。

老師は、28歳で第22代ご当主となられた。先々代二十世富仙秀岳和尚（文久3年—昭和16年）を大変に尊敬されていた。（『生涯詩禅一如の教田を貫き蛇石集2巻を残す。又、墨跡、禅画等にも偉れ社会教育の先覚でもあった。』東泉院記）書、禅画、篆刻全てが一流の方だったという秀岳和尚

は、書や水墨画など地域の方々によく差し上げていたという。時代が流れ、孫子の代には元に戻されたものも多く、書、禅画など寺宝は充実していたという。

老師は文学好きの父親から影響を受け、少年時代から文学に興味を持ち学んできた。2004年発刊の「扣之帳」小田原の文学発掘シリーズ（15回）では岩越昌三、川崎長太郎、北原武夫、中河与一、北原白秋他小田原ゆかりの作家について執筆をされている。また「明治文学読書会」では、その読書量と記憶力のよさに敬服しながら、総評を通して幅広い読書の楽しみ方を学ばせて頂いた。またこの3月には小田原文学館での西海子サロン講師を務めるなど、現在も小田原の文化を牽引されている。

そんな老師の青少年期は戦争の時代、美術には触れる機会はなかったと振り返った。若干28歳の当主には寺宝の軸や書画等読めないものも多く、必要にも迫られ書家に学ばれた。次第に書画への興味は高じ、30を過ぎる頃にはお寺にふさわしい作品をポケットマネーでコレクションされるまでになっていった。禅僧の作品中心のコレクションは50年を経て井上三綱はじめ小田原ゆかりの作家の美術作品迄広がり、現在では収蔵庫で大切に保管されているという。

「井上三綱」「井上正子」「上垣候鳥」など当時活躍中の蒼々たる作家たちとの交流も、こうしたご縁で広がり深まっていった。描くだけでは食べられない多くの作家たちの良き理解者として制作依頼もされてきた。かつて、ここで橋本撲々さんの油絵を観たときの感動は今も鮮烈に覚えている。昨年絵を描きながら生を全うされた「橋本撲々（1922～2013）」さんの個展が小田原で実現したのも老師の尽力によるものだ。カリスマ的作家たちの素顔を間近で見続けてきた老師が天才的な人物と評されたのは、「間中喜雄」氏だ。当時迷信扱いされていた東洋医学を日本に紹介した漢方医として名高いその人である。本業以外に、絵、彫刻、小説まで書かれた間中氏の足跡は、石碑と共に迫力ある彫刻を境内で観る事が出来る。また晩年小田原に住まわれた「中河与一（1897～1994）」とは、市への中河コレクションの寄贈の橋渡しをされている。

る。菩提寺として文学碑を境内に持ち、命日には今も『夕顔忌』を行い供養が続いている。東泉院山門の額は井上三綱の書である。一気呵成に書いたかのような見事な書である。その書をアトリエに見に行っったことだ。所狭しと大小さまざまな紙に『東泉院』と書かれていたのに驚いたという。外には見せない芸術家の芯の部分を知る貴重なエピソードである。また、自分の生活を貫く芸術家の多面性を知る老師は、「作品を観て満足しなければダメ」とおっしゃった言葉が今も心に残っている。

750年前道元禪師が説いた「禅の心」は、今も形を変え『禅文化展』によって学べることに感謝である。「禅文化展」の楽しみ方を伺った。この展覧会は、一般の人には難しい「禅」について書画を使って広く学べる場であると言われた。禅を一言で表す『無』。並べて観ることで、同じ文字が異なって見え、その人毎の違い、人柄を観る事が出来るのは楽しみである。また、「有」を超越した『無』を書いた禅僧の書には、抽象絵画に通ずるものがあるという。そういうと、隣室の床の間に案内下さった。丈幅の上部に一文字「無」とある。太く丸みを帯びた筆質、私には力強い「聖」のようにも観えた字の下方には、力の抜いた署名。実にバランス良く配された書であった。老師は、この堂々とした軸をたいそう気に入っておられ、禅僧は書を通し抽象画が登場する前から抽象の先端をやっていたと言われた。長年多くの作品に触れ自由な審美眼を養った美術愛好家らしいお言葉だ。4月20日には、老師の講話を拝聴出来る。「禅の心」に触れながら、書画の深さと自由な楽しみ方を実感できる今年の『禅文化展』を、ぜひ多くの方に楽しんでいただきたい。

（新九郎友の会 木下和子）



**美術館学芸員による出張ギャラリートーク**

**「石田徹也展—ノート、夢のしるし—」**

平塚市美術館にて開催される「石田徹也展」を企画担当されている学芸員の勝山滋氏に、展覧会の見どころをお話ししていただきます。

**4月22日（火）19:00—20:30（開場18:30）**

**場所：ギャラリー新九郎 入場無料**

**主催：おだわら ミュージアム プロジェクト**

**企画展「石田徹也展—ノート、夢のしるし—」**

**2014年4月12日（土）～6月15日（日）**

**会場：平塚市美術館 0463-35-2111**

石田徹也は現代社会を鋭く風刺する画風で知られる画家です。本展では、代表作約110点を核に、石田が遺したノートや、下絵やアイデアスケッチを初公開します。



三月三十一日終了）ボレマンズデッドバンテージ（原美術館ペラスケスやマネを研究したという、流麗な筆さばきによる人物像を主に描いている。人物は横向き、後ろ向き、伏し目がちのポーズをとるなど、絵を見るものと視線を合わせることにはない。何かしら不穏な感じを与える画面である。「The Prophet」という男の顔の絵は、ドガの「若い婦人の肖像」を想起させる。グリーン・セピア・ライトレッドの落ち着いた色調で、写真がブレたような描き方をしている。そこに現代的な意味が付与されているように思う。ドガは若い婦人の肖像を見事に描き切っている。ボレマンズは男の顔を描いているのではなく、その像から喚起される何かを描いているのである。現代アートにとって、対象は描写されるものとしてではなく、イメージとして捉えられる時代なのであろう。

図録によれば、「ボレマンズの人物像は彼が『ニヒリストのヴィジョンの開放』と表現する複雑な状態で占められている。生命は意味も目的も価値もないという存在に関する議論を開きたいという願望は、ボレマンズの視点に本質的にあり、また彼の哲学の中心である。」と解説されている。ニヒリストではない私が、このような絵に魅力を感じるのにはなぜだろうか。絵とは何か。芸術とは何か。人間とは何かということを考えさせる。

原美術館には、多くの若者が訪れている。皆個性的でファッションセンスが良い。現代アートに親しむ若い層が増えていることに文化の成熟を感じる。④

※「二月のこと」で大震災の年を間違えました。二〇一一年に訂正すると共に、お詫びいたします。

**三月31日**

三月三十日終了）ボレマンズデッドバンテージ（原美術館ペラスケスやマネを研究したという、流麗な筆さばきによる人物像を主に描いている。人物は横向き、後ろ向き、伏し目がちのポーズをとるなど、絵を見るものと視線を合わせることにはない。何かしら不穏な感じを与える画面である。「The Prophet」という男の顔の絵は、ドガの「若い婦人の肖像」を想起させる。グリーン・セピア・ライトレッドの落ち着いた色調で、写真がブレたような描き方をしている。そこに現代的な意味が付与されているように思う。ドガは若い婦人の肖像を見事に描き切っている。ボレマンズは男の顔を描いているのではなく、その像から喚起される何かを描いているのである。現代アートにとって、対象は描写されるものとしてではなく、イメージとして捉えられる時代なのであろう。